

# コロナ下における保育と幼児の育ちに関する研究 —言葉の育ちを中心に—

新井 美保子\* 杉江 栄子\*\* 鎌田 桃代\*\*\* 古橋 さつ子\*\*\*\* 新美 洋祐\*\*\*\*\*

## 要 旨

保育実践において、コロナ下の園生活では三密を防ぐ新しい生活様式が求められ、人との距離を取りつつ間接的な関わりによる保育が工夫された。マスク生活により、表情や言葉が伝わりにくい日々の中で幼児の言葉の育ちはどのような状況であるかを探るために、5歳児を担当している保育者を対象として意識と取り組みの工夫について調査した。結果からは、保育者は幼児同士が繋がるために意図的に情報共有や共通の目的を通して関わる機会を保障しているが、視覚的、聴覚的情報の共有が多く五感を通じた直接経験ではないため、言葉の原動力となる豊かな感情体験に欠けることが推測された。今後はさらなる工夫と保護者との連携が課題であると言える。

キーワード：コロナ下の幼児の育ち、言葉の育ち、5歳児、保育の工夫、ごっこ遊び

## I. 目的

コロナ下の保育実践では、三密（密集・密接・密閉）を防ぐ新しい生活様式が求められ、集まり、群れて、一定の空間でコミュニケーションを取りながら仲間作りをするのではなく、少人数、分散、開放の条件が求められた<sup>(1)</sup>。このような生活様式に加えて、マスク着用で過ごすことも重なり、心と心を十分に通わせ、笑い合ったり、もめたりしながらも思いを伝え、育ち合っていく機会を得にくくなっていたのではないかと懸念される。

先行研究では、保育者のマスクの着用により、保育者の声が子どもに届きにくいことや保育者の表情が子どもに伝わり難いこと<sup>(2)</sup>が明らかになっている。また、幼児は相手がマスクをした状態では、喜び、驚き、悲しみは評定しづらいこと<sup>(3)</sup>が示されている。

このように、保育者とのコミュニケーションが取り難い中で、子ども達の言葉の育ちや、人と関わる力は育っているのだろうか。人との関わりの基盤を作る幼児期にマスクを着用する生活が続くことで、子どもの育ちが阻害されていないかと危惧される。

そこで本研究では、3年間の園生活がコロナ下であった令和4年度5歳児に着目し、担任保育者の意識と具体的な取り組みの工夫から、言葉やコミュニケーションの育ちを捉えることとした。そしてコロナ等の感染症下において、子どもの育ちを保障し、

言葉やコミュニケーション能力を育むために、保育においてどのような取り組みが必要か、言葉の育ちを視点に置いた保育の在り方を検討する。

## II. 調査の概要

### 1. 調査の目的

3～5歳児の3年間をコロナ下で生活してきた5歳児に焦点を当て、卒園まで残り4か月となった現在の育ちの状況について、特に言葉やコミュニケーションの発達状況に着目し、保育者の意識から明らかにする。合わせて、保育上の取組みについても明らかにする。

### 2. 調査時期・方法

2022年11月～12月上旬にGoogleフォームを用いて実施した。愛知県西三河地域のA市・B市の公立園を中心に、5歳児担当保育者に回答を依頼した。

### 3. 倫理的配慮

質問紙（Googleフォーム）の冒頭に調査目的と得られた結果は統計的に処理し市及び個人情報が見られることはなく、回答は自由意志であること等を明記し、回答をもって承諾とした。

また、A市とB市の担当課には文書により事前に調査目的・内容等を説明し、調査実施の許可を得た。合わせて各園長にも文書により調査目的やデータの

\*岡崎女子大学 \*\*名古屋学芸大学 \*\*\*名古屋市立植田幼稚園 \*\*\*\*保育の実践と研究・安城の会 \*\*\*\*\*安城市立さくら保育園

取り扱い等について説明し、許可を得た<sup>(2)</sup>。

#### 4. 調査内容

主な調査内容は以下の通りである。

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に関する育ちの状況
  - ・「言葉による伝え合い」に関する育ちの状況
  - ・友達と関わる様子
  - ・ごっこ遊びの様子と子どもの会話内容
  - ・子ども同士のコミュニケーションを促す取り組み
  - ・コロナ下でなければ取り入れたかった活動
  - ・卒園に向けて今後幼児の言葉やコミュニケーションの育ちを支えるために行いたい活動
- 自由記述による回答はK J法を援用して分析した。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 回答者の属性

有効回答者 105 名（回答者数 109 名）の所属は、公立保育所 54 名（51.4%）、公立認定こども園等 40 名（38.1%）、公立幼稚園 10 名（9.5%）、私立保育所 1 名（1.0%）で、現在 5 歳児を担当している保育者である。

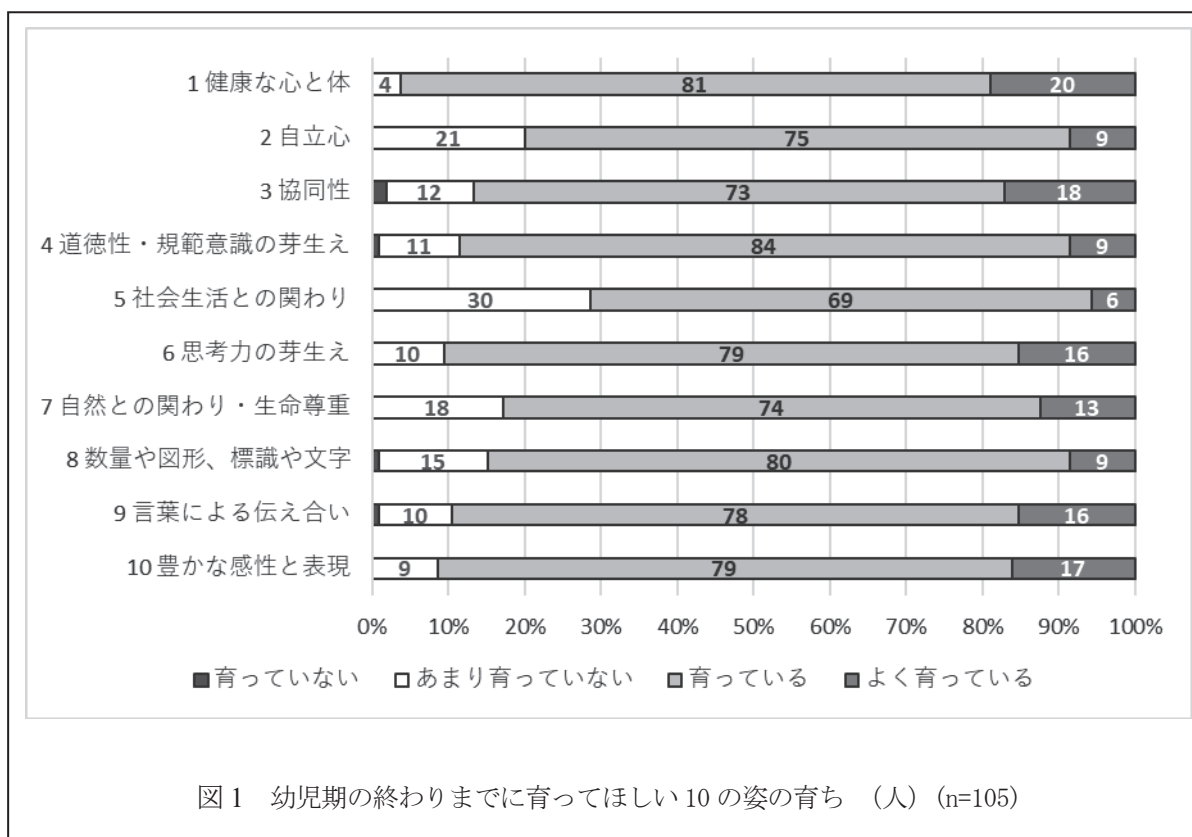
回答者の雇用形態は正規雇用が 98 名（93.3%）で、保育経験年数は 6～10 年目 35 名（33.3%）、2～5 年目 30 名（28.6%）と、10 年目以下の回答者が 6 割を占める。この他、11～20 年目 28 名（26.7%）、21 年目以上 12 名（11.4%）である。5 歳児担任経験回数は、今回が 1 回目の保育者が 34 名（32.4%）と最多で、2 回目 22 名（21.0%）、3 回目 16 名（15.2%）、4 回目 13 名（12.4%）、5 回目 5 名（4.8%）と減少する。6 回目以上は 15 名（14.3%）で最多経験回数は 9 回目（2 名）である。

クラスの園児数は 16～20 名が 43 名（41.0%）と最多で、次いで 21～25 名が 20 名（19.0%）、26～30 名が 20 名（19.0%）である。この他、2～10 名という少人数クラスが 12 名（11.4%）、11～15 名も 10 名（9.5%）あった。

なお、コロナ感染状況としてこの 1 か月間の休園・学級閉鎖について尋ねたところ、36.2%が「ある」と回答している。

#### 2. 幼児及び保育者のマスク着用状況と言葉の聞き取り

幼児のマスク着用状況は、「保育室内のみ着用」60.0%、「保護者や子どもの判断による」31.4%であ



り、室内では6割以上の幼児がマスク着用で過ごしていることがわかる。

保育者の着用は「保育中全て着用」90.5%、「保育室内のみ着用」6.7%であり、基本的には保育中はマスク着用であることがわかる。透明フェースシールド等の使用も23.8%あった。

このようなマスク着用状況下で幼児の言葉を保育者は聞き取れるか尋ねたところ、「だいたい聞き取れる」75.2%、「よく聞き取れる」19.0%という肯定的な回答が9割以上を占めた。また、幼児同士の言葉の伝わり具合も、マスク着用時に「だいたい伝わっている」79.0%、「よく伝わっている」18.1%という肯定的な回答が大多数を占めた。マスク着用の生活により言葉の聞き取りが難しくなっているのではないかと予想されたが、今回の結果からはおおむね問題とは言えない様子が窺える。

なお、「あまり伝わっていない」とする回答は3名(2.9%)と少なかったが、この3クラスは園児数が20名、27名、29名と比較的多い状況がみられた。言葉を聞き取りにくい要因は何か、引き続き探っていくことが必要であろう。

### 3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に関する育ちの状況

#### (1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿

それぞれの項目について、現在担当しているクラスの子どもの育ちの状況を4件法で尋ねた。結果は図1に示した通りである。

「育っている」「よく育っている」の合計を見ると、「健康な心と体」の回答は101名(96.1%)で最多であり、「言葉による伝え合い」については、94

名(89.5%)であった。これらを含め10項目中9項目は肯定的な回答が80%以上となっており、担任として一定の成長を認めていることが分かる。その中で「社会生活との関わり」は肯定的な回答が75名(71.4%)と特に低く、「あまり育っていない」と感じている回答者も30名(28.6%)あった。コロナ下の生活では、感染予防の観点から小学校との連携や地域の人との関わり、園外の施設利用や行事等に参加する機会が減少したことが報告されている<sup>3)4)</sup>が、結果としてこのような育ちの状況認識につながっているのではないかと考えられる。

また、肯定的な回答が多い項目でも内訳は「育っている」が多数であり、「よく育っている」の数値が低い項目も見られた。例えば、「道徳性・規範意識の芽生え」は肯定的な意見が83名(88.6%)と多くを占めるが、その中で「よく育っている」とする回答は9名(8.6%)だけであった。10項目全ての平均値を見ても、「よく育っている」とする回答は13.3名(12.7%)に過ぎず、コロナ前との比較ができないため判断は難しいが、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、十分な育ちであるといえるのかどうか疑問が残るところである。

(2) 「言葉による伝え合い」に関する育ちの状況  
次に、10の姿の中で、今回の主テーマに関連する「言葉による伝え合い」についてさらに詳細に状況を把握するために、説明文を下記の通り①～⑤に分解し、「とてもよく育っている」から「育っていない」までの5件法で尋ねた。

- ① 保育者や友達と心を通わせ言葉を交わす
- ② 絵本や物語等に親しみ、豊かな言葉や表現を身に付ける
- ③ 経験や考えを言葉で伝える
- ④ 相手の話を注意して聞く
- ⑤ 言葉による伝え合いを楽しむ

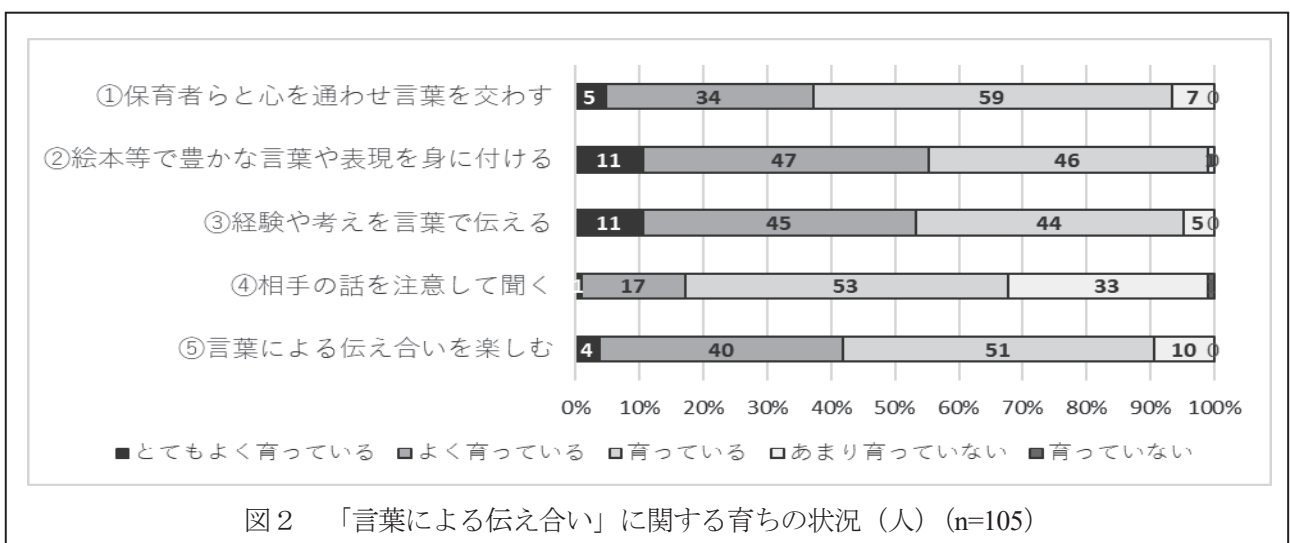


図2 「言葉による伝え合い」に関する育ちの状況(人)(n=105)

- ③ 経験したことや考えたことを言葉で伝える。
- ④ 相手の話を注意して聞く。
- ⑤ 言葉による伝え合いを楽しむ。

図2に示した通り、コロナ下であっても①②③⑤の項目について「育っている」「よく育っている」「とてもよく育っている」が90%を占める結果となった。しかし、その中で「育っている」を除いたより肯定的な回答（「よく育っている」「とてもよく育っている」）を見てみると、②③はそれぞれ55.2%、53.3%と過半数に達しているが、①は37.1%、⑤は41.9%と半数に満たない。特に「④相手の話を注意して聞く」の項目は17.1%と低く、反対に31.4%が「あまり育っていない」と回答している。③の結果から見ると言葉で伝えることはできているようだが、④の相手の話を注意して聞くことがあまり育っていないとすると、⑤の伝え合いを楽しむことが本当にできているのか、伝え合っているように見えて、実は一方的に主張するだけのことになっていないか、危惧される場所である。①の「心を通わせ言葉を交わす」でも「よく育っている」「とてもよく育っている」とする回答が約1/3にとどまっていることを考えると、言葉の発達の基盤となる相手への信頼感や親近感、関係性を築きたいと思う気持ち等が育っているのかどうかを見る必要があるだろう。

なお、コロナ下の影響と考えられる要因を自由記述で聞いたところ「マスク下の表情、口元等から心情を読み取る経験が少ない」「異年齢の交流する機会が少なく、前年度の年長児が何をしていたのか知らないことが多く、年長児になったときに、やってみたい！こうしたい！という思いが強い子が少なかった」等というように、マスクが要因で口元の動きが見られず、心情が読み取りにくいという意見や、コロナの影響で実体験からの経験が不足しているこ

とを指摘する意見等があった。

#### 4. 友達と関わる場面とコロナ下の影響について

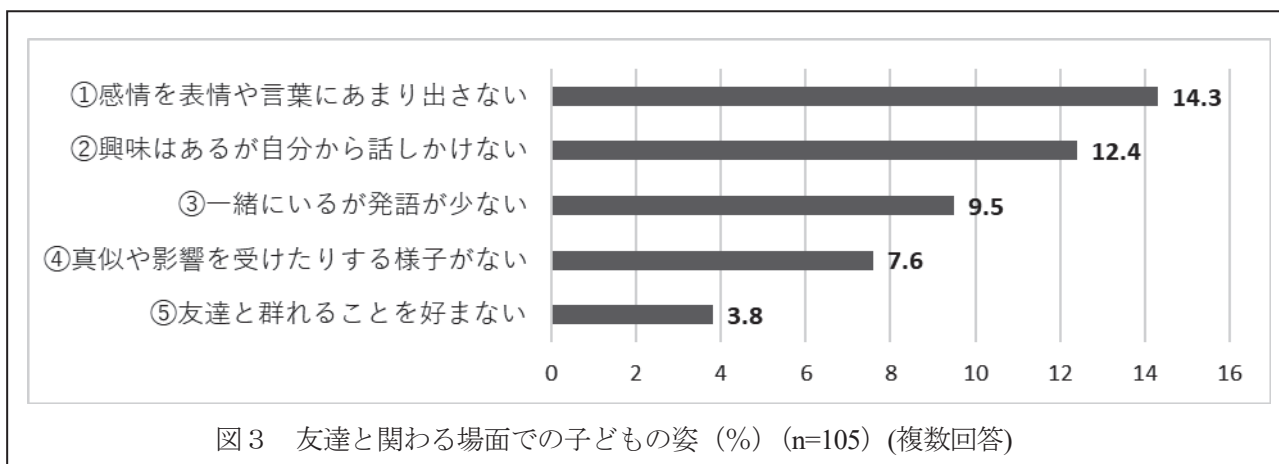
友達と関わる場面の子どもの姿について当てはまる項目を複数回答で尋ねたところ、図3に示した通り、回答が多い順に「①友達と一緒に過ごすのが感情を表情や言葉にあまり出さない」14.3%、「②友達に興味はあるものの、自分から話しかけようとしない」12.4%、「③友達と一緒に過ごしているが、発語が少ない」9.5%、「④友達と同じ場で過ごす、真似をしたり影響を受けたりする様子がない」7.6%、「⑤友達と群れることを好まない」3.8%であった。

また、「コロナ下の生活の影響によって増えている傾向」については、「他の子ども達より大人という方がうまくいく」17.1%、「自分の感情を声で表現することが少ない」「表情が乏しい」はともに14.3%、「自分の意見を主張することが少ない」「声が全体的に小さい」はともに13.3%であった。

一方、「子ども同士が多人数で関わって話すること」については、「よくある」61.0%、「ある」31.4%、「あまりない」7.6%であった。

「どのような場面で子ども達が関わっているか」を尋ねたところ、88名から自由記述の回答が得られた。内訳は21名が意見交換、12名はごっこ遊び、11名は発見や気づき、8名はルール確認であった。その他、遊びへの誘いかけや作り方の伝え合い、認め合い等の回答も見られた。

これらの結果から、一部の保育者は、コロナ下において子ども同士のやりとりの難しさ、感情や意見の表出の乏しさを感じていることがわかる。また意見交換やごっこ遊び、発見や気づきの場面等で子ども同士が関わっていると捉えていることから、子ども達が自分たちの遊びで自分たちの楽しみ方を追求



したり、思わず誰かに伝えたくなくなったりする場面で、関わりや言葉のやりとりが生まれていることがわかる。コロナ下ではこのような活動でさえも十分にはできなかったことが考えられ、小学校入学後も継続して、子ども自らが友達と関わり、やりとりをしたくなるような活動を支援していく必要があるだろう。

### 5. ごっこ遊びにおける子どもたちの会話等

ごっこ遊びは、身近な物事や人物を真似たり再現したりする遊びで、子どもたち同士で場面をイメージし共有するために、言葉を中心として動きや表情で表現し合っていく。

そこで、言葉のやりとりが多い遊びの一つとしてごっこ遊びに着目して、実態を捉えることとした。

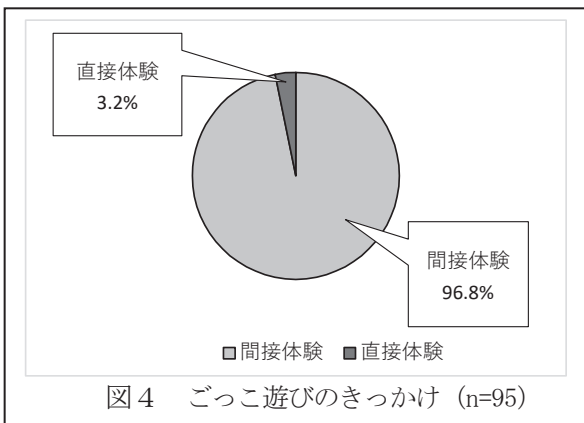
設問は、アンケート実施の1か月間での(1)クラスでブームになったごっこ遊び、(2)きっかけ、(3)子どもたちの会話やつぶやきについて尋ね、記述された回答を分析した。全回答者105名中97名から回答が得られた。

#### (1) ブームになったごっこ遊び

ごっこ遊びの内訳は、①劇ごっこ(以下ごっこを省く)19件、②主人公名を名称とした桃太郎、白雪姫等32件、③ハロウィン7件、④その他(ケーキ屋、キャンプ、寿司屋等)39件あり、重複するごっこもあったが、全50種類のごっこ遊びを楽しんでいたことがわかった。また、全回答者中97名(92.4%)が(1)の「ブームになったごっこ遊び」について回答していることから、子ども達の身近に見立てやなりきりたい物事や人物が存在し、それぞれの園でごっこ遊びは生まれていたことが分かった。

#### (2) ごっこ遊びが始まるきっかけ

きっかけ別では、①発表会29名、②絵本26名、③行事(まつり、ハロウィン、遠足等)16名、④その他(見立て、YouTube、TV、行った、言葉かけ等)24件であつ



た(図4)。「～に行った」「～をやった」のような実体験を伴ったきっかけが書かれた回答としては、寿司屋2件とキャンプ1件の計3件だけであった。コロナ下の外出制限の影響か、実際に行った経験をきっかけとするごっこ遊びはかなり少ないことが分かる。同じ寿司屋でも「家でYouTubeで見た」が1件あった。このように、コロナ下においては遊びのきっかけが実体験ではなく、絵本やYouTube、TVの視覚的な情報や発表会等の園行事を通しての間接体験が多いことが明らかになった。

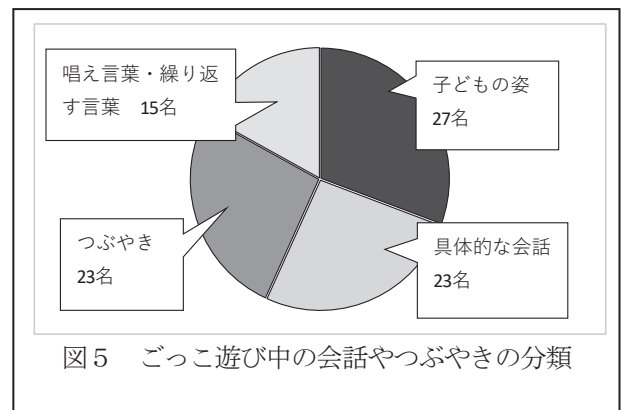
#### (3) ごっこ遊び中の会話やつぶやき

ごっこ遊び中での会話やつぶやきを記入してもらったところ、88名の回答が得られた。記された回答は、①子どもの姿に関すること27名、②具体的な会話内容23名、③つぶやき23名、④唱え言葉・繰り返す言葉15名であった(図5参照)。①子どもの姿としての回答は、「話し合う姿が見られた」「楽しんでいた」「たくさん会話があった」「再現していた」「広がった」等であり、具体的な子どもの発した言葉ではなく、会話やつぶやいている様子として記されていた。

具体的な会話としては下記のような回答があった。

「私、レジの人やるからケーキ作ってくれる」  
 「いいよ」  
 「でもケーキ入れる袋がない。どうする」  
 「私、作っておくよ」  
 「ケーキが無くなる。新しいケーキお願い」

このようなやりとりから、子どもたちは、ごっこ遊びを通して役割意識をもち、自分のやりたいことを言葉にして相手に伝えたり、相手との言葉のやりとりから状況を把握して自分のできることを考え合ったりしていることが分かる。そして、会話の中



で自分のことを言えていたり、自分を出せる場になっていたり、交流が持っている等、会話に言葉の育ちがみられる。

子どもの姿で捉えて具体的な言葉の記入がなかった回答の中にも、もっと丁寧に言葉で拾い上げることが出来ていれば、例えば自分のことが言えていない、自分が出せる場になっていない、交流が持てていない等、言葉の育ちの気になる部分をもっと明らかでできたかもしれない。その点で調査方法もさらに工夫していきたい。

保育の中では群れて楽しんでいる全体像を捉えることも大切であるが、一人一人の言葉の育ちを読み取ることで、保育者が言葉を添えて代弁することや、言葉を発する後押しなどの援助のヒントが得られるとも考えられる。また、保育者が子ども一人一人の言葉を意識的に捉え援助することで、自分の思いを伝える、相手の思いを知る、互いのやりとりを楽しむ等のコミュニケーション能力を育む機会になると考える。

子どもたちは、コロナ下で実体験や社会体験が限られている中でも、様々にごっこ遊びを楽しんでいることが分かった。では保育者は、どのような場を作り、どのように援助を工夫しているのだろうか。

## 6. 子ども同士のコミュニケーションを促す取組み

コロナ下において、子ども同士が言葉のやりとりを楽しんだり、コミュニケーションを図ったりするために、担任保育者として保育環境や取組みについて工夫していることを尋ねた。58名(55.2%)から回答された77件の記述を分析したところ、複数回答で以下の6カテゴリーに分類できた。

まず、「①会話や話す機会を設定」が20名(34.5%)と最も多く、具体的には、経験等を発表する場を設定することや、グループやクラス全体で話し合う機会を設定すること、会議や作戦を立てる時間を設定すること等が挙げられた。次いで「②自然に会話が増えるような遊びを導入」が16名(27.6%)だった。具体的にはごっこ遊びや、グループでの制作活動、子ども達が中心となって活動を進めること等が挙げられた。「③会話が増える遊び環境の工夫」としては15名(25.9%)の回答があり、具体的には絵本場面を保育室に再現することや、絵本を一緒に見て楽しめる場を設定すること、数人で遊べるスペースを広く設定すること、ごっこ遊びでイメージがもてるような環境設定を工夫すること等が挙げられた。「④

保育者の援助の工夫」に関する回答は13名(22.4%)あり、具体的には、個々の話に耳を傾け子どもが安心して話せる環境や雰囲気を作ることや、子ども同士の言葉のやりとりを引き出すような関わりをすること、子どもの声を拾って周りに伝えること、オーバーリアクションやジェスチャー等表情豊かに反応して言葉のやり取りを楽しむこと等が挙げられた。

「⑤感染対策をした上での関わり工夫」は9名(15.5%)からの回答だった。具体的には、食事中に会話が楽しめるようにパーテーションを設置、制作時も斜め向かいに着席、コーナーの場所を離し広いスペースを確保、近距離で会話する子どもにはマスク着用を促す、戸外ではマスクを外し表情が見えるようにする、換気、保育室の移動や他クラスとの交流時は手洗い・消毒を実施等、様々に感染対策をしながら子ども同士の交流を促す工夫が見られた。

「⑥言葉遊びの導入」は4名(6.9%)の回答があった。具体的には、しりとり、〇のつく言葉集め、文字探し、言葉のビンゴ、なぞなぞ等の言葉遊びが挙げられた。また、これらを小グループ対抗のゲームにしている例もあった。

以上により、①や⑥のようにクラスやグループでの活動を意図的に導入している例や、②③のように子ども主体で自然に会話が生まれるような工夫、④⑤のような保育者からの積極的な援助など、様々な工夫がなされていることが明らかになった。

## 7. コロナ下でなければ取り入れたかった活動

コロナ下でなければ保育に取り入れたかった活動について自由記述で尋ねた。90名(85.7%)から回答された記述を分析したところ、複数回答で以下の5カテゴリーに分類できた(図6)。

まず「①異年齢の交流」が34名(37.8%)と最も多く、具体的には年中児と遠足に行き、手をつないでエスコートしてあげる、お店屋さんごっこにお客さんとして呼んであげたかった、室内での異年齢の集団遊び等が挙げられた。

次いで「②食に関する活動」が33名(36.7%)だった。具体的には育てた野菜を自分で調理して食べる、会話を楽しみながら食べる、給食当番の実施、食に関する行事を行う等が挙げられた。

「③地域との交流や園外活動」としては27名(30.0%)の回答があり、園外保育、地域の方との交流、他園との交流、社会見学、就学に向けて小学校校とのふれあい交流、運動会・発表会・卒園式など

に小学校の先生を招待する等が挙げられた。

「④ふれあい遊び」は12名（13.4%）からの回答だった。友達とのふれあい遊び、学年での集団遊び、手をつないで行う伝承遊び、ボール運びなどのモノをリレーしていくようなゲーム、人間知恵の輪等が挙げられた。

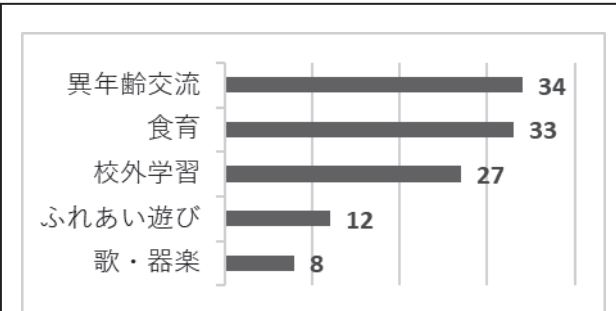


図6 コロナ下でなければ保育に取り入れたかった活動（人）

「⑤歌や器楽」は8名（8.9%）の回答があった。具体的には歌を大きな声で歌う、みんなで輪になって歌う、マスクをつけていない状態で友達の色を見合いながらたくさん歌ったり表現遊びをしたりする、ピアノを使った楽器遊び、合唱・合奏等が挙げられた。また他にも、運動会での親子触れ合い競技・玉入れや綱引き、観客に制限を設けず会を行うという回答もあった。

人流や人との接触機会を削減するためにマスクの着用や活動の制限などの感染防止策を講じることで、様々な人と関わる活動や集団活動のどのようなものが減少しているのか、回答により具体的に明らかになった。園外の人や施設等との交流・体験が制限されただけでなく、園内においてもクラス外の子どもの交流や、クラス内であっても友達とのふれあいやモノの共有がかなり制限されていたことがわかる。また、飛沫感染予防の観点から、食に関する活動や合唱、合奏活動も実施が困難だったことがわかる。これらの経験の不足は、人間関係の構築や言葉の発達だけではなく、例えば社会生活への理解や適応、表現活動、生活習慣など、他の成長・発達にも幅広く影響を及ぼしていることが考えられる<sup>5)</sup>。今後どのような影響が現れているのかを引き続き探るとともに、課題となった部分については就学後も継続して意識的な支援が求められる。

## 8. 卒園に向けて今後幼児の言葉やコミュニケーションの育ちを支えるために行いたい活動

幼児の様子を見て、言葉やコミュニケーションの育ちを支えるために今後卒園に向けて行いたい活動について自由記述で尋ねた。71名（67.6%）からの回答を分析したところ、複数回答で以下の3カテゴリーに分類できた。

「①話し合い」が46名（64.8%）と最も多く、自分の思いを伝えたり相手の話を聞き入れたりする話し合いの場を積極的に設ける、人の話を聞いたり自分の意見を言ったりする機会をつくる、活動を楽しむために意見を言い合ったり、認め合ったりする場をもつ、目的を実現するために友達と話し合い考えを出し合いながら活動を進められるようにする、友達の色を見合いながら話を聞く機会を増やしていき、友達の思いに触れながら思いを伝え合うことを増やす、相手の言葉をしっかり聞きながら話し合いをする、友達と話し合い考えを出し合いながら活動を進める、人前で自分の事を話す等が挙げられた。

次いで「②他学年・他園との交流」が10名（14.1%）の回答であった。具体的には自分たちで考えたことを他学年の前で話す機会を作る、郵便ごっこをして異年齢での交流を楽しめるようにする、歌や司会などで年下児のお手本になる場面を増やしていく等が挙げられた。

「③言葉遊び・感謝の手紙」は5名（7.0%）からの回答があった。ジェスチャーゲームを行い相手の意図を受け取る力も育む、お世話になった職員や年下の子達にプレゼントを作って渡したり、感謝の気持ちを込めて手紙を書いたりして思いを伝える機会をつくる、郵便屋さんごっこをするという回答もあった。

保育者は、就学に向けて幼児が自分の気持ちや考えを言葉で相手に伝えることや相手の言葉を聞こうとする態度を育てることを大切に考え、学級の活動に取り入れようとしていることが分かった。

## IV. 全体考察

本研究から、保育者の意識として「幼児期の終わりまでに育ててほしい10の姿」に向かう5歳児の姿として、おおむね育てているが、「社会生活との関わり」についての育ちは十分ではなく、関係性の広がりや乏しい状況であることが分かった。感染予防のためにやむを得ず交流は制限され、異年齢や異世

代間との交流活動を行うことはできなかった。それにより、言葉のやりとりだけでなく、憧れ、いたわり、親しみ、喜び、感謝等の感情が育つ機会も減少していたのではないかと推測する。

また今回は、言葉とコミュニケーションの実態を捉えるために、その様子を探る方法としてごっこ遊びについて調査を行った。そこで、実体験を伴わないごっこ遊びが多数を占めていることが分かった。従来のごっこ遊びは、家庭や地域で心を動かしたることについて模倣を楽しんだり、憧れを実現したりするような実体験の再現であったと考えられるが、経験が不足している昨今では、絵本やYouTube等のICT機器を含めた視覚教材や情報教材、発表会に向けての取組等がごっこ遊びのきっかけになっていた。コロナ下では、活動の制限があるため、確かに実体験の補足としてICT等の活用も1つの方法と言えるだろう。ただし、現状ではICTでは視覚的聴覚的情報は得られても、触覚、嗅覚、味覚といういわゆる五感を通した経験は得られにくい。また一方的な情報発信においては、思いもよらないハプニングや失敗、偶然起きる出来事等の経験の広がりも得にくく、感情の揺さ振りの振り幅も大きくはないと考える。感動、失敗、怒り、悔しさ等、実体験でこそ得られる感情体験は、幼児期の心の育ちに重要である。ICTの活用は大人社会では日常生活の一部になっており、その姿を幼児は身近に見て、家庭では触れる機会も多いと考えられる。だからこそ園での保育では、人間として生きて育っていく基盤作りとして、これまで以上に五感を通した直接的具体的な体験の積み重ねを目指していくことが必要ではないだろうか。

また今回の研究からは、三密を予防することに留意しながらも子ども同士のコミュニケーションを育むために、保育者が意識的に様々に取り組んでいることが分かった。子ども同士の話し合いの場やごっこ遊びの環境作り、グループでの制作活動などの機会や、しりとり等の言葉遊びの導入である。このように、保育者は5歳児の発達を考慮し、言葉のやりとりや関わりに必要な情報や目的の共有の機会を保障するために、様々に関わり合いやりとりを楽しむ機会を工夫している。共有したものごとにより、子どもたち同士が言葉とともに感情や表情を表出したり、いざこざの解決や気持ちを切り替える経験をしたりできるのである。その中では、保育者はファシリテーター役を意識し、子ども達の主体的対話的な姿を支えることが重要であろう。また卒園に向け

て保育者は、子どもが自分の気持ちや考えを言葉で伝え、相手の言葉を聞こうとする態度を育てるために、子ども同士の話し合いの場を設けたいと考えている。このように、5歳児において言葉を伝える、相手の言葉を聞くというやりとりの積み重ねの経験こそが、将来的に新しい発想や相手の良さに気づき、協働的な活動を通した深い学びに繋がる、対話的な関わりになると考える。

今回の研究では、子ども達がコロナ下であっても日々の遊びを楽しんでいることや、保育者が意図的に言葉とコミュニケーションの育ちに向けて取り組んでいることが明らかになった。しかし、行動制限が続いた幼児期の3年間を通して、五感の働きや試行錯誤の経験不足も懸念された。勿論、子どもの育ちの全てを園で保障できる訳でもない。そこで改めて家庭との連携強化を図りたいと考える。園では体験できない家庭や地域での様々な社会的体験や、会話を楽しむことの基盤となる家庭での日常経験を個々の子どもが園に持ち込むことで、それが他児に波及し、結果として園生活は多彩で豊かなものになっていく。そしてそれらの日々の経験が子ども全体の育ちを促す力にもなっていくと考える。

2023年5月8日より新型コロナウイルスは感染症法に規定される5類感染症に移行し、行動制限が解除され、感染対策は個々の判断に委ねられることになった。保育現場でも徐々に行事を再開するなど、コロナ禍以前のような賑わいが戻り始めている。しかし、形式的に不用意に戻せばよいということではないだろう。コロナ下の行動制限を経験したからこそ、今後の保育では言葉やコミュニケーションの土台を築く幼児期の重要性を保護者と共有し、家庭との連携を図りながら保育を工夫して子どもの成長・発達を支えたいと考える。

## 注

- (1)新型コロナウイルス感染症の予防法に関して、2023年5月10日以降も厚生労働省ホームページには、1. 密閉空間(換気の悪い密閉空間である)、2. 密集場所(多くの人が密集している)、3. 密接場面(互いに手を伸ばしたら届く距離での会話や共同行為が行われる)という3つの条件のある場では、感染を拡大させるリスクが高いと考えられていることが記載されている。(厚生労働省『新型コロナウイルスに関するQ&A(一般の方向け)』令和5年5月10日 3. 新型コロナウイルス感染



症の予防法』)

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryou/dengue\\_fever\\_qa\\_00001.html#Q3-1](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/dengue_fever_qa_00001.html#Q3-1) (閲覧日: 2023年11月23日)

(2)本調査は研究開始時点での所属研究機関において研究倫理審査の受審対象には該当していない。

## 引用文献

- 1) 西館有沙 (2016) 「マスク着用が保育に及ぼす影響に関する保育者の認識」『富山大学人間発達科学部紀要』10(2)、pp. 125-130
- 2) 堀由里 (2022) 「幼児の感情理解に及ぼすマスクの音声の影響—コロナ禍の表情認知に対する試行的検討—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』25、pp. 173-178
- 3) 杉江栄子・新美洋祐・古橋さつ子・新井美保子 (2021) 「幼稚園・保育所等における保護者への情報発信方法の検討 (2) —コロナ下における感染対策と家庭との連携—」『愛知教育大学幼児教育研究』22、pp. 45-54
- 4) 日本保育学会課題研究委員会 (2023) 「コロナ下における保育と子どもの育ちを考える I —予備調査から明らかになったこと—」『日本保育学会課題研究委員会 Report 2022』 pp. 5-6
- 5) 高橋智・田部絢子・能田 昂・内藤千尋・石井智也・石川衣紀・池田敦子 (2023) 「子どもは現在もコロナ禍の最前線にいる—子どものコロナ禍後遺症と発達の困難・リスクの動向—」『チャイルド・サイエンス』26、pp. 11-15

## 付記

本研究は5名による共同研究であり、調査の計画・実施・集計・分析・考察等を全員で行った。なお、主となる執筆分担部分は次の通りである。

新井：Ⅱ、Ⅲ 1、2、6、全体編集

杉江：Ⅰ、Ⅲ 4、Ⅳ

鎌田：Ⅲ 7、8

古橋：Ⅲ 5

新美：Ⅲ 3

